

第 1 回懇話会の意見・要望に係る発言要旨

【関係部局との連携】

ア 移行支援計画のデータの移行について、ペーパーでなくて、生のデータで移行できないかということが常々言われている。障害のある方の「個別の教育支援計画」というのが、生まれてから亡くなるまでの間作られるが、その教育を受ける機会においては「個別の教育支援計画」という教育に特化した計画を立てる。

障害を有している方の一生のことを考えていくと、保健福祉局や子ども家庭局との連携は、重視しないと、真に障害のある方の支援には繋がらない。このプランの中で、そういう方向性を少しでも打ち出していきたい。

イ 定型発達の子どもたちを対象としたカリキュラムで幼稚園を運営している場合、特別な支援を要する子どもたちを多く受け入れると、加配はありがたいが、例えば、特別な支援を要する子どもが 5 人いると 20 人の子どもの中に教師が 5~6 人もいるという変則的な状況になり、逆に定型発達の子どもたちの育ちをどう保障するかなど、別の課題が出てきている。乳幼児に携わっている者としては、子どもたちは全てが特別な支援を要するものと理解しており、インクルーシブな教育を最も実行しやすい場所であると理解している。そこに福祉と教育を融合させながら工夫していくことが必要と思っている。

ウ 子ども総合センターとの情報共有（就学指導等就学先決定に関する在り方の整理）【意見票】

エ 社会的自立に向けたキャリア教育の充実⇒関係機関・団体との連携【意見票】

（関係部局との連携のうち、放課後等デイサービス関係）

オ 障害者にシームレスにどう関わっていくかということが非常に大事だと思っている。たくさんのお子さんが放課後等デイサービスを利用しているが、学校現場との連携というのが、見えてこない。放課後等デイサービスとしても、学習支援など障害のある方たちに、何かやることがたくさんあるのではないかなと思っています。その場合、学校と福祉の領域とはもう少し連携していくべきである。

カ 先ほど、学校と放課後等デイサービスの担当との連携について話があったが、放課後等デイサービスの充実はとても重要であり、全くそこができていないと感じている。

キ 中学校でも放課後に送迎車がどんどん入ってくる。知的学級の子ども、自閉症・情緒学級の子どもも、本校では8割ぐらい放課後等デイサービスに行っている。議題によっては、支援会議の場にお呼びすることもあるが、それぞれが全く方針もやり方も違っている。

学校としてもコーディネーターがいるので、これを窓口に連携を取らないといけないと思うが、どの辺までどうすればよいか、難しいところではある。今後、連携の対象としては多分避けては通れない。ますます放課後等デイサービスは重要なポジションを占めていくのではないかと思っている。

ク 放課後等デイサービスにいる時間がとても長く、学校と変わらないぐらいの時間を過ごしているので、学校と放課後等デイサービス、福祉と保護者が協力して同じ方向を向いて、子どもに接していけたらありがたい。

【ICTの活用】

ケ 教育の現場は、この5年でだいぶ変わったという感覚がある。例えば、自閉症や発達障害の子ども達においてはICTの活用が進んだが、とても相性がいいと私は思っており、活用が進んでいくことを期待している。

コ ICTは、本当に相性がよく、知的障害のお子さんは、すごく世界が広がるので、しっかり活用していきたい。

【連続した支援】

サ 中学校では、特別支援学級の生徒の進路をどう将来に繋いでいくかが課題である。知的障害特別支援学級では、特別支援学校ではなく、一般の高等学校に進みたい生徒たちが増えてきているが、通常の学級とは教育課程が違うことから入学後の本人の負担やその先にある就労支援について説明し、果たしてその子にとってそれがベストなのかという点を保護者と話を決めていく。

自閉症・情緒障害特別支援学級については、通常の学級と教育課程が同じであるため、一般の高等学校への進学を見据えて、できるだけ長く通常の学級で生活をしたい、交流学习の時間を増やしたいと強く希望する生徒や保護者が増えている。その時に、特別支援学級の担任が、「特別支援学級として、どのような支援体制を構築することがその子にとってベストか」ということを、きちんと保護者と話していかななくてはならない。保護者が、学校生活のほとんどを通常の学級で過ごし、一部だけを特別支援学級で過ごす、通級指導のような形態を強く望んでおり、悩みどころである。

シ 高校との連携で、中学から高校に上がった時に高校と個別の教育支援計画を引き継ぐが、卒業した後についても、ある程度この連携の在り方を探っていければ、と思っている。

ス 学校にいる間は、とても手厚く支援があるが、卒業前には、卒業後の不安の方が大きくなる。したがって、先が見える、私たちが目標をもって子どもたちに接していけるようにしていただきたい。

セ 個別の教育支援計画の作成状況が評価指標の一つに入っていたが、例えば、個別の教育支援計画で、子どもがどう育っていくかを描くことは容易ではない。18歳時点だけではなく、卒業後の子どもたちは、一社会人としてどのように生きているのか。親御さんも年齢を重ねる中で、どんなニーズの変容があるのか、それらを踏まえて、教育の立場から何ができるかを各学校で考えることを教育委員会からも投げかけるとよいと思う。

ソ 小中9年間を見据えた進路指導（特に、高校進学に向けた指導にあっては、小学校教育員も正しく、かつ、更新した知識・理解が必要）【意見票】

【就労支援】

タ 障害の方の就労支援が大事だと思っている。高校を出て、一般就労や就労継続支援A型などに行っているが、離職などの問題もあり、学校現場等、実際に福祉を提供する所とか、北九州市全体で、スカウトをしっかりと取り組んでいくことが重要であり、シームレスに関わっていくことになるのではないかと。

チ 特別支援学校の高等部で職場実習が行われるが、中堅の先生が専門分野として進路の指導を行うなど、進路の先生を少し充実させていただきたい。

ツ 就労支援の充実について、現在、ICT機器を活用した就労支援事業（これまで手薄と感じていた病弱者や精神疾患患者への就労支援）が全国で展開されており、本市においても関連企業が立ち上がると聞いている。プランにおいても保健福祉局と連携するとなっており、高等部を卒業する生徒一人一人の実態やニーズに応じた就労支援の充実を図ってほしい。【意見票】

【相談体制、早期支援・相談】

テ これまで情報交換会を行って、早ければ早いほど支援の効果があるというのが、

今の結論になっている。ぜひ満3歳児健診とか、その辺りからの支援を入れていただきたい。早期発見・早期手立てについて、満3歳児の時に、身体的な診断は行うが、心を診る満3歳児健診になっていない。その辺の連携も盛込めたら、早期発見に繋がると思う。

ト 相談支援体制の整備について、特別支援教育について北九州市内でも、様々な場所で充実した活動がなされているが、それぞれが繋がっていない。情報交換会を行って初めて、どのような活動が行われているか、助けを求めるときはどこに行けばいいのかなどを知ることができる。

そこで、整備のみならず、この整備されたものを繋いでいくという視点を、整備の中に入れれば、個々の力がより相乗的に動くのではないかと思う。

ナ 就学指導の成果と課題の整理（就学指導等就学先決定に関する在り方の整理）
【意見票】

ニ 障害がある保護者等に対する広報活動の強化（就学指導等就学先決定に関する在り方の整理）【意見票】

又 困難を極める保護者への対応の在り方（就学指導等就学先決定に関する在り方の整理）【意見票】

ネ 早い時期からの支援が子どもにとっては有効ということが社会的に認知されてきていると感じる一方、就学相談にかけたいが、親が納得しない場合もあり、混乱を実感している。

ノ 就学時における保育園・幼稚園との連携は進んできている。事前の情報を学校に引き継いでいくことが、お子さんのためになるという視点、意識が広がってきていると感じており、早期相談等を受けられる方も増えている。ただやはり逆に、就学相談まで結びつけられなかったお子さんもいる。

【教員の専門性】

ハ 主な重点項目が「教職員の指導力及び専門性の向上」で、目指す方向性が「チーム学校の観点に基づく教職員全体の特別支援教育の理解促進」であり、これが、今求められている指導力・専門性の向上と方向性が合致しているのか、この目指す方向性は漠然としていて、結果的に教員の専門性の向上や指導力向上にダイレクトで結びついていかないのではないかと危惧している。

ヒ 先生方の専門性に着目して大きくは2点申し上げたい。

1 点目は、専門性の中核に何を見据えるか、この点の共有というものが大事である。教育内容との関連で、専門性を捉えれば、3点あると思う。

1 つ目は、障害特性を踏まえた教科指導である。その際に、障害特性の理解は当然必要だが、より必要なのは教科の目標分析ができるかどうか、である。

2 つ目は、多様な実態に即応した授業づくりである。同単元異目標による授業づくり、授業展開、に関する専門性が求められる。

3 つ目は、自立活動である。例えばコーディネーターの先生方が、個別の配慮・支援について、この子にどんな支援や配慮が必要なのかを考える際の視点が自立活動ということになる。

大きな2 点目は、その専門性をいかに担保し、継承していくかである。国の制度設計として、センター的機能というのがあるが、これを担う特別支援学校の先生方も若年齢化が進んでおり、特別支援学校の先生方が、校内の先生方を育てながら、地域の特別支援教育の下支えもしなければならない状況である。

フ 北九州市では、自立活動に関する研修を一校だけではなく、全市を挙げて取り組んでおり、他の自治体に比べると、一歩二歩先を歩みながら研修の充実を図っている。私自身の希望であるが、若い先生方を含めて、特別支援学校・特別支援学級・通級の先生方の自立活動の指導力を向上させていくための研修方法について、北九州モデルを5 年間プランぐらいで作ってはいかがかと思っている。

ハ 今、地域の話が出たが、障害のある子どもたちがよりよく育ち、よりよく生きていくということを考えたとき、日々の実践について共通語で話す力を特別支援学校・学級の教員が身に付けていくことが大事だと思っている。特別支援学校・学級の実践について語るとき、小中学校の通常の学級の先生に通ずる言葉でないと、同じ教育として受け留められない。

ホ 「特別支援教育を担う教師の養成・採用・研修等の在り方等に係る最近の動向、主な提言及び今後の検討事項について」（令和3 年10 月25 日文部科学省）の内容については、北九州においても喫緊の課題である。教員養成系大学が担う内容もあるが、是非プランの中にも反映させていただきたい。【意見票】

マ 特別支援学級の担任に対する研修のさらなる体系化と強化【意見票】

- ・ 特に、新担任、経験年次3 年以下
- ・ 学習指導・学級経営ハンドブックの作成（知的版・自閉情緒版）
⇒ある程度のモデルが必要
- ・ 市教委指導主事等による訪問指導（教員向け）の強化

【障害者理解】

ミ この特別支援教育推進プランではなく、本市の教育プランについてだが、毎年、外部評価を受けているが、その中で、ある教授の方から、セルフ・アドボカシー、自己権利擁護に着目した取組みをしていただきたいという記述があった。こういう視点を入れていくことが正しいのではないかなと思っているので、お願いしたい。

ム 適切な障害受容に立った進路指導【意見票】

※ 特に、グレーゾーンに位置する生徒の進学先が厳しい現実

特に、高校進学に向けた指導にあっては、小学校教員も正しく、かつ、更新した知識・理解が必要

メ 障団連や地域の方ともお話をさせていただく中で、特別なニーズがあること、いろいろな障害があることに対する意識が、皆さん薄いところもある。学校教育の特別支援ということも含めて、地域との連携も併せて、何か考えていける手立てがあればいいと思う。

モ 地域で生きていく上で、特別支援学級や特別支援学校に通っているお子さんのことを、もっと知ってもらうことが重要である。

作品展や、こういう能力があるということを知らせてもらうのは大変ありがたいが、同じ学校や学級のお母さんたちがこんなことで困っているということ教えるのも、重要と感じている。

特別支援学級から特別支援学校の中学部、高等部へ入学するお子さんの保護者からは、小学校・中学校にいた時に、相談する所が分からなかったという声を聞くので、特別支援学級の保護者にも支援がどこで受けられるかという情報や、こういうお子さんが学校にいるということを一般の保護者にも知る機会を増やし、子どもたちもその理解をしてもらえると、地域でより生きやすくなり、障害をもった方が生きやすくなる社会になるのではないかなと思う。

ヤ 4番の障害者理解の促進の中で、近年、いわゆるオリ・パラ教育をずっと推進してきた。子どもたちの中で、今まで感じていたものとは違う形で、障害者理解が進んだと思っている。ただ大会が終わったことで、この理解に向けての意欲が止まってはもったいない、意味がないと思っているので、今まで継続して培ってきたものを今後のプランの中に何らかの形で生かして、発展できたらいいのではないかなと感じている。

ユ 医療の現場でも、専門性のところで、感覚過敏に対する理解とか配慮が、上位に上がってきている。学校現場でも、子どもに隠れている過敏性とか敏感とか鈍感とか、よく見ていただくということが必要になってくると思うので、よろしくお願いしたい。

【その他】

ヨ 合理的配慮というものがどの程度までなのかということについて学校現場としては考えることは多い。プランの、1の(1)の1に合理的な配慮の蓄積とあるが、これをどう蓄積し、発信しているのか、特に蓄積の部分について教えていただきたい。

ユ 評価して見直して、新たな改善策を立てるのが、プランだと思うが、一応説明にあったように、他の計画の特別支援教育に関する評価というのは、例えば教育プラン、行政評価、子どもプランで、評価の基準が異なっている。ある程度統一しておいた方が、いろんな評価を私達もしやすいのではないかなと思う。

リ 評価について目標分析が大事で、実施していることがきちんと分析されて、数値化されて見えないと、一般市民から見て何が順調か分からない。どう具体的に分析をして、明確化をしていくかが重要である。それはどこかに盛り込んでいただきたい。また、就労支援も順調になっているが、60%から120%になっており、よく分からない。この表現は、具体的に明確化をしていただきたい。

ル この5年間で、現場でも良くなっているということを知って安心した。

いろいろな見直しの点において、保護者の気持ちとしては、いろいろなお子さんたちが取り残されないように、お子さんのことが抜け落ちたような感じで進まないように、行ってほしいと思う。数字や分析も必要であるが、最終的には、本人を見て、本人を中心にするという部分は、福祉でも、他の分野でもお願いしたい。

レ 構成員の皆様方からの意見の一つとして、このプランと教育プラン等との整合性の意見も多少出てきた。そうしたときに、教育プランの改正時期、それからこの特別支援教育プランの検討・改正時期の問題を、今後、改めて検討しながら、ご意見をいただきながら進めて参りたい。

ロ 特別な支援を要する児童生徒と不登校との関係の整理【意見票】